実践レポート

「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を育む社会科学習」

～３つの取り組みから、地域社会とつながることを模索する～

高松市立十河小学校
教諭　靏 羽 美 緒

１　はじめに

知識基盤社会やグローバル化が加速度的に進む中、人口減少や少子高齢化社会の到来により、地域社会の活力の減退が懸念されている。新学習指導要領においても、「一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される」とあるように、社会の課題を自ら見つけ、他者とつながりながら考え、判断し、表現（行動）していくことが求められている。しかし、平成２７年度の本校の全国学力・学習状況調査の児童質問紙調査、「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか」「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか」などの地域や社会に関する質問では、肯定的に答えた児童の割合は、４５％と香川県や全国の平均を下回り、課題が残る結果であった。

そこで、地域や社会に愛着をもち、そこで見られる課題を自分のこととして捉え、自らよりよい社会の形成に参画しようとする児童の育成をめざして継続的に取り組んできた。ここでは研究内容に示す３つの取り組みから、社会形成に参画する資質や能力の基礎を育む社会科学習を追究した。

２　実践の内容・方法

（１）研究内容

①　地域社会とつなぐ教材の開発

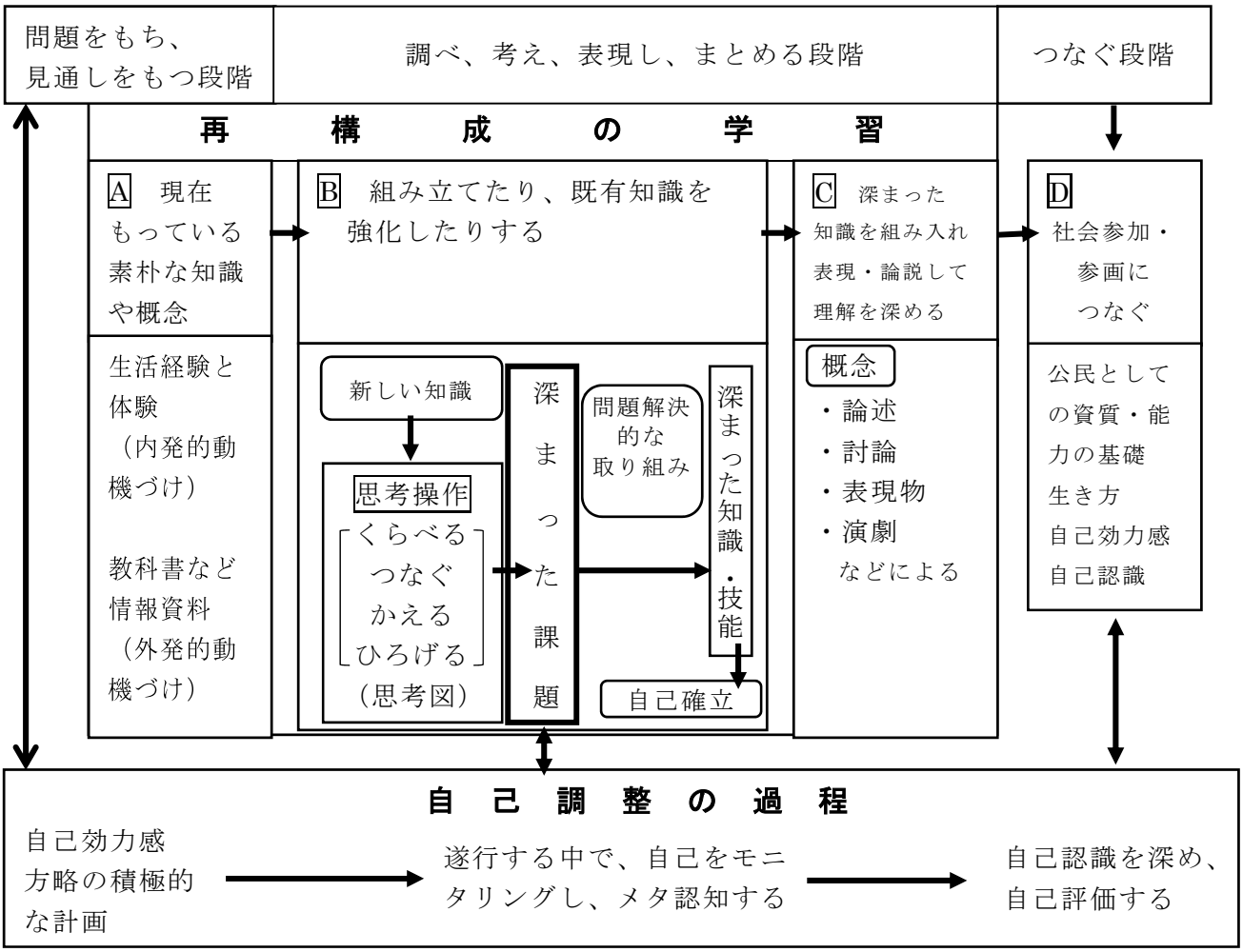
教科書に掲載されている事例は、身近なものでないことが多い。では、どのような教材が社会形成に参画する資質や能力の基礎を育成することにつながるのだろうか。まず、地域社会の問題を考えられる教材が大切であると考えた。過去から現在の視点だけでなく、未来を見据えた取り組みを行っているような「ひと・もの・こと」を扱うことが教材開発のポイントである。また身近にずっとあるが、気が付いていない教材や直接体験できるものであればより身近に感じられる。地域社会に積極的に関わりたくなる「ひと・もの・こと」を発掘することが大切である。

②　単元構成の工夫

主体的な学習となるために、既習知識や疑問に思ったことなどを子どもたちと整理し、単元を見通す学習問題をつくること、次に認識を深めるために、自分たちで調べたことをもとに概念化すること、最後に学校と地域社会を結び付ける仕掛けとして、単元の山場で深まったことをもとに新たな課題を設定することを大切にした。

従来より、単元を貫く学習問題を意識して実践してきたが、単元展開の最初の段

階では、単元の学習にどんな内容や表現があるかといったことに関心をもつが、本質的な「なぜ」「どうして」といった追究するべき問いにまで至らなかったり、単元の終末まで学習意欲が続かなかったりするという問題点が見られた。そこで、単元が進むにつれて調べたいこと、考えたいことが焦点化してきた時に子どもから生まれる課題（深まった課題）を設定するようにした。これにより、習得したことを活用するだけでなく、知識を再構成することを促すため、学び（社会認識）も深まる。認識の深まりとともに地域社会に対して自分ができることを考えることで、社会形成に参画する資質や能力の基礎を育成することにつながっていくと考えた。



【十河小における社会科の学習過程】

③　「ゲストティーチャー」から「パートナー」へ

新学習指導要領にもあるように、地域とともにある学校をめざすには、「ゲスト」から「パートナー」という考え方への転換が求められる。単元の中で一回だけ都合よく招くのではなく、複数回関わる状況をつくることで、児童がいつでも身近に感じ、ともに問題を解決している思いを抱かせることを大切にしたい。パートナーの要件として、中学年では、「身近である」「何度も関われる」「体験を通しながら学べる」ことを重視している。高学年では、地域から日本、世界へと対象が広がっていく。「その人物の文字資料」→「映像やメッセージなどの間接交流」→「実際に会う」というように中学年での直接的な結びつきではなく、間接的な結びつきでつながりを強くし、協働しながら問題解決していくことを考えた。

３　実践の成果

（１）地域社会とつなぐ教材の開発

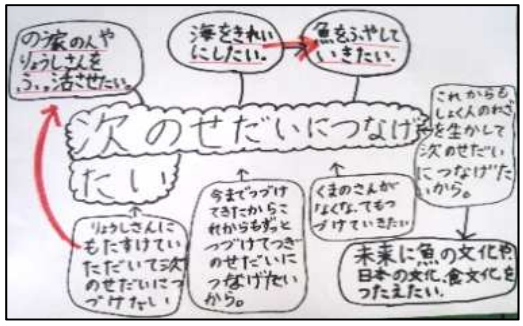
３年「工場の仕事」で取り上げた蒲鉾店は、児童の身近にある店であり、社会の変化に合わせて商品や売り方を変化させながら、110 年という歴史の中で店舗を発展させてきている。伝統を生かしつつ、食生活の変化を見据えて新しい商品の開発に挑戦し、消費者へ届けている。また、市や県で開かれるイベントに参加し、他業種の人とつながり、生産者の輪を広げることで地産地消や地域の活性化を目指している。地域の発展を考えながら生産の仕事をしていることを理解することは、自ら社会へ関わろうとする意欲や態度を育成することに効果的だった。

６年「世界の中の日本」では、世界の課題の現状や原因を調べ、それらを解決するために行っている活動を調べていった。また、平和で持続可能な国際社会の実現をめざして活動している人物に焦点をあて、思いや願いを考えることを通して、平和を願う日本人として世界の人々と共に生きていこうとする自覚を養うとともに、相手国に合った活動や相手国の自立をめざした日本らしい国際協力の在り方を見出すことができた。相手国の状況を知るために現地の人の思いを探るためにパートナーの人に詳しい状況を伺おうというように、主体的に関わろうとする姿が見られた。

（２）単元構成の工夫

３年「工場の仕事」では、10 年という歳月と 500 万円という費用をかけて新商品を開発したが、１日 1～2 個しか売れていないということに驚いた。儲からないのに作り続けるのは、何か理由があるはずだと考え、調べたいことを焦点化し、「なぜ、長い年月と多くの費用をかけて、蒲鉾ではない新しい商品を開発したのだろう。」という深まった課題を設定した。深まった課題を追究していくことで、ものづくりに携わる人も、製品をつくるだけではなく、地域の発展を視野に入れ、多くの人と結びつきながら地域のよさを味わえる製品づくりをしていることに気付くことができた。意見交換会では、「持続可能」をキーワードに「環境をさらによりよいものにし、次の世代へとつなぎたい」という生産者の思いに共感できたことをふり返りから見取ることができた。「ぼくたちも環境を守る仲間の一人だ」という声も聞かれた。

【深まった課題について話し合った板書】



【持続可能なものづくりについて考えたノート】

６年「世界の中の日本」では、これまで行ってきた国際協力の活動の中に、その国の人の役に今も立ち続けている事例と改善が必要な事例があった。「なぜ違いが出るのか」という子どもたちの問いから深まった課題を設定し、国際協力に必要な視点を探った。初めは、お金やものを与えることが国際協力だと思っていた児童だが、「援助がなくなっても続けられるか」と未来志向で話し合うことで、「与えるのは、ものやお金ではなく、自立する意志である」ことに気付き、国際協力の大切な視点を理解することができた。次の単元においても、積極的に持続可能な視点（未来志向）で考えたり、国際社会の中で自分や日本がどのように関わっていくべきか判断したりする姿が見られ、よりよい社会の形成に参画しようとする意識の芽生えを感じた。

（３）「ゲストティーチャー」から「パートナー」へ

３年「工場の仕事」では、５回の交流を通して学習を進めることができた。蒲鉾づくり体験から、職人の技の難しさを実感した。何度も会うことで互いの距離も縮まり、自ら関わろうとする姿が多く見られるようになった。行き来が可能な距離、体験できる環境を設定することが大切であった。

【蒲鉾づくりのねらいについて話し合う】

６年「世界の中の日本」では、日本の国際協力の活動を調べる中で、高松市からカンボジアへ移住し、衛生教育などの NGO 活動を展開しているうどんハウスの K さんと資料を通して出会った。テレビ電話を通じて交流を重ね、K さんとともに国際協力の在り方について考えた。単元の終末では、帰国を機に来校が実現し、直接語り合うことができた。K さんの姿から生き方を学ぶこともでき、互いにとって貴重な機会となった。

【うどんハウスの K さんと
国際協力の在り方について話し合う】

4　普及させたい取組と期待される効果

社会参画のモデルとなる人や事象を発掘し、発達段階に応じて複層的にかかわりながら地域社会の問題を解決していくこと、単元の山場で問いを焦点化し、深まった課題により探究的に学ぶことを通して、社会科本来の魅力ある学習が成立する。社会形成に参画する資質や能力の基礎を養うために、次の要件を満たすようにする。

①　現実の社会を認識できる価値ある内容を扱うこと
②　思考操作による思考力・判断力・表現力の育成を大切にすること
③　未来志向で持続可能な社会づくりの見方・考え方・生き方を求めること

5　課題及び今後の取組の方向

全国学力・学習状況調査での地域や社会に関する児童質問紙調査の数値は 55%を越え、少しずつ上昇傾向にある。今後は、社会科だけでなく他教科との関連や教科横断的な視点からも研究を進め、変化の激しい地域社会を前向きに捉え、よりよい社会の形成に参画していける資質や能力の基礎を明らかにし、育んでいきたい。